

学会報告

第50回日本救急医学会総会・学術集会

あさい やすふみ¹⁾、あおき ひでとし²⁾
浅井康文¹⁾、青木秀俊²⁾

雄心会函館新都市病院¹⁾、北海道医師会²⁾

はじめに

第50回日本救急医学会総会・学術集会が、山口芳裕（杏林大学医学部救急医学・教授）会長（写真1）の主催で、2022年10月19日から21日まで東京・京王プラザホテルで開催された。今回の学術集会は、50周年の節目となることから「さあ、これからの50年について話をしよう」がメインテーマに掲げられ、次の50年に向けたビジョンを創出することに挑みたいとの、山口会長の斬新な企画であった。

学会形式

手持ちできるミニプログラムが学会場で入手でき、学会発表は題名と演者のみで内容抄録はなく、過去の学会とは違って分厚いプログラム集はなかった。

一般演題の発表はすべてWeb配信（オンデマンド：Live配信なし）で行われた。内容は、心肺停止、中枢神経、循環、呼吸、多臓器不全、感染症、COVID-19、高齢者、PCPS・ECMO、病院前医療・救護・メディカルコントロール、航空医療、災害医療、脳死・終末期医療など、従来と同じ多岐にわたる発表が行われた。また学生・研修医セッションもWeb形式で行われた。

学会場

コロナ禍であり、非接触型の体温測定が連日実施されていた。会場では全員がマスク着用、壇上の討論では、透明なパネルのシールドが取り付けられていた。1,000人規模の会場が3つ、ワンフロアに用意されて、それぞれの会場で、まる1日1つのテーマを議論する形式をとっていた。他のフロアは、企業展示や共催のセミナー、専門医共通講習、救急科領域講習が行われていた。また第1日目の最後に、全国救命センター長会議が開かれた。

テーマ

「救急医学をSDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）という視座で捉え、17のゴール、169のターゲットのプロフェッショナルから話を伺い議論し創発することで、次世代の社会において果たすべき自らの役割やあり方を考え、



写真1：山口 芳裕会長

救急医学ブランドの再構築を図る機会にしたい」との山口芳裕会長の考えであった。SDGsは、「誰一人取り残さない」持続可能な社会の実現を目指す世界共通の目標で、2015年の国連サミットにおいて全ての加盟国が合意した「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の中で掲げられた。「世界中にある環境問題・差別・貧困・人権問題といった課題を、世界のみんなで2030年までに解決していこう」という計画・目標である。この目的のため、今回の学会では、発言者にはそれぞれの専門分野を牽引するトップランナーを招聘し、広く学会会員以外から参加を促していたのが、これまでの本学会と異なる点であった。

大きな9つのテーマは、1）気候変動、2）安全保障、3）研究、4）街づくり、5）情報・技術革新、6）貧困・異文化・飢餓、7）高齢化・医療経済、8）教育・人材育成、9）コロナ・新興感染症で、現地開催（Web配信なし）であった。このうち、聞くことができたテーマを紹介する。

1. 気候変動

オープニングセミナーでは八幡晃久氏（日本総合研究所）が、「50年後を考えて何になる？～未来洞察にヒントあり～」で、米国民の25%に普及するまでに、カラーテレビ18年、携帯電話13年、インターネット7年を要し、これからは変化の兆しを捉え、想定外の未来に目を向ける「未来洞察」が有用と述べた。今田由紀子氏（気象庁）は、「異常気象が異常でなくなる世界」で、温暖化した地球で発生する極端な気象現象の現状と今後について、最先端の「数値気候シミュレーション」を述べた。2050年に+2度、21世紀末に+4度、気温が上昇するとのことであった。

2. 安全保障

山本勝也氏（防衛省）は「世界で最も厳しい安全保障環境に直面している日本」、杉山晋輔氏（外務省顧問）は「ウクライナ・台湾と日米同盟」、高市早苗氏（経済安全保障担当大臣）は「日本の安全保障」、永岩俊道氏（シスコシステムズ）は「日本は

安全保障上極めて脆弱な国」を講演した。富永 哲欣氏（NTTアドバンステクノロジー）は高高度核爆発等による強力電磁波パルス（HEMP）の影響範囲は半径50～250Kmと解説した。唐沢勇輔氏（Japan Digital Design）は、サイバーセキュリティの未来予測では、「リスク＝脆弱性×脅威×重要度」で表し、サイバーセキュリティ対策はいたちごっこで、サイバー攻撃による電子カルテの書き換えのリスクにも言及した。

3. 研究

「日本版敗血症診療ガイドライン2020の特徴と展望」、「日本版と国際版敗血症診療ガイドライン作成に参加して」、「日本版敗血症診療ガイドライン2024の方向性」、「DIC大国ニッポン創生の歴史と今」などが講演された。また敗血症と微小循環のパネルディスカッションが行われた。

4. 街づくり

PLATINUM SEMINARで、ロシア文学の亀山郁夫氏（名古屋外国語大学学長）は、「核の悲劇をいま顧みる」で、アレクシェーヴィチによるドキュメンタリー文学の「チェルノブイリの祈り」や原爆体験を綴った「祭りの場」を取り上げ、核の犠牲者たちの苦悩の意味を探るとともに、今回のウクライナ侵攻に見るロシア的メンタリテイの「蛮性」について講演された。

5. 情報・技術革新

日本では2018年に経済産業省が「DX（Digital Transformation）推進ガイドライン」を示したのを契機に、DXが広まった。坂野哲平氏（アルム）は、「医療DXの未来を考えよう」で医療DX後のヘルスケア・医療の未来をグローバルな視点で、日本がとるべく方向について述べた。砂田薫氏（国際大学）は「デジタル社会の未来をつくる・人間中心の情報システム」、前田裕二氏（NTT宇宙環境エネルギー研究所）は「IOWN構想・しなやかな社会の実現に向けて」、中村武宏氏（NTTドコモ）は「5Gのさらなる高度化と6G」を講演した。

鍵本忠尚氏（ヘリオス）は「災害医療とエネルギーの未来」で、年間5G相当という国内最大級の電池工場を岡山県に建築中で、また浮体式の風力発電からケーブルを敷設することなくPower ARK（電気運搬船／災害対策船）から電力を取り出せることから、広くエネルギーの自給が可能となろうと述べた。福澤知浩氏（Sky Drive）は、「空の移動革命への挑戦」で、空飛ぶクルマは2025年から各社スタートと述べた。藤井翔氏（伊藤忠商事）は、「ドローン物流が切り開く未来」の中で、医師数の地域偏在と地方医療従事者の高齢化に対して遠隔診療による処方薬配送のニーズがあり、ドローンにより2020年に五島市に、日本初の目視外飛行を行ったことが紹介された。唐川伸幸氏（国際遠隔病院機構）は、「自然災害及び安全保障における、医療リスクと国

民保護」では、事故は起こるもので、軽減はできるが、常にリスクがあり備えるべきとし、科学的に電磁波パルス（HEMPなど）が発生し、甚大なる我々の生活電子インフラへの影響が懸念され、命を預かる医療環境への影響は計り知れないものがあると述べた。

6. 高齢化・医療経済

香取照幸氏（上智大学）は「超高齢社会で求められる医療の役割」で、今回のCOVID-19禍は「すでに起こっている未来」であり、20年後の医療現場は複雑な基礎疾患を持つ患者の急性期対応・感染症対応が常態化するため、患者の変化に対応できなければ、再び我々は医療崩壊の危機を迎えることになる」と述べた。石川ベンジャミン光一氏（国際医療福祉大学）は「人口の構造と偏在の変化を理解する」で、約50年後の2070年の人口は1950年代の水準まで縮小すると予想され、我々はその中で次代に引き継ぐもの、解決すべきこと、これから整えるべきものを考える必要があると述べた。康永秀生氏（東京大学）は「日本の医療と経済（50年後の姿は?）」で、今から50年後の日本経済を誰も予想できないが、明るい未来は全く想像できなく、将来の医療が置かれる状況も果てしなく暗いと述べた。井上岳一氏（日本総合研究所）は、人口減少は希望であり、問題は人口増加を前提につくられた制度やインフラが人口減少時代には適合しないことだと述べた。

7. コロナ・新興感染症

忽那賢志氏（大阪大学）は「日本国内における新興感染症への備えと今後の課題」、西條政幸氏（札幌市保健福祉局）は「ワクチン迅速開発プラットフォーム整備による新興感染症の大規模流行への備え」、阿南英明氏（神奈川県庁）は「COVID-19の体験は日本の医療構造改変を導き出せるか」などを述べた。

各々のテーマごとに、若手医師の未来討論も行われた（写真2）。



写真2：未来討論

LEAP AHEAD SEMINAR

最終日には、阿部剛士氏（横河電機）は、「イノベーションは止まらない！-技術進化の光と影-」で、21世紀に入りVUCAワールドが当たり前にな

り、さらにコロナ、DXと外部環境変化は予測不可能になりつつある。さらに技術は指数関数的進化を続けており、この数年間技術進化による良い面ばかりがハイライトされてきた。一方で進化による課題が顕著になってきた。人類が今後どのように技術と折り合いをつけるかを問うと講演した。VUCAとは、Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字を取った造語で、社会やビジネスにとって、未来の予測が難しくなる状況のことを示す。それに続いての、Future Castingで、「共に考え共に描く50年後の救急医学の未来シナリオ」が討論され、閉会した。

終わりに

日本救急医学会の会員数は、10,359名である。今回の学会はコロナ禍であり、以前のように多くの会場を梯子することはできなくなった。また、世代交代や若手救急医の台頭を痛切に感じた。来年の第51回は、国立国際医療研究センター病院救命救急センター長の木村昭夫先生が会長で、11月28日から30日までの3日間、東京ドームシティで行われる。

令和4年秋の叙勲・褒章受章者（北海道医師会員）

先般、令和4年秋の叙勲・褒章受章者が発表され、当会会員で以下の方々が叙勲の荣誉に浴されました。ここに受章者の方々のご功績をたたえ、謹んでご芳名を掲載させていただきます（敬称略）。
受章者各位には、心からお祝いを申し上げます。

◇旭日小綬章

長瀬 清 元（一社）北海道医師会会長
保健衛生功労

◇旭日双光章

稲川 昭 元（公社）室蘭市医師会会長
保健衛生功労

◇瑞宝中綬章

木村 格 元（独）国立病院機構宮城病院長
保健衛生功労

◇瑞宝中綬章

三浪 明男 現（独）労働者健康安全機構北海道せき損センター院長
北海道大学名誉教授
保健衛生功労
教育研究功労

◇瑞宝小綬章

後藤 良一 元 北海道保健福祉部技監
保健衛生功労